

●話題を追って[2]:次世代防災を担う若人たちへの期待 —宮城県多賀城高校の災害科学科
**宮城県多賀城高校 災害科学科スタート 防災教育のパイロットスクールに
今村文彦・東北大学災害科学国際研究所長が祝辞——「多様な防災人材の輩出を期待」**


宮城県多賀城高校災害科学科の案内リーフレットより(画像クリックで拡大表示)

2年前、本紙は2014年6月1日号(No. 91)で「新たな地域防災の担い手浮上 ～中高生・大学生への期待」(文末に同号へのリンク)と題して、宮城県多賀城高校(宮城県多賀城市)に「災害科学科」が創設されることを伝えた。その多賀城高校が去る4月8日、「2016年度入学式」と「災害科学科開設式」をとり行った。

入学式式辞で同校の小泉 博・校長は、「災害科学科は全国の防災教育のパイロットスクールとしての役割がある。普通科も災害科学科も一緒に学ぶカリキュラム『くらしと安全』や『情報と災害』があるので、かけがえのない自分を大切に3年間の高校生活を充実させるよう期待する」と述べた。引き続き行われた「災害科学科開設式」では菊地昭吾多賀城市教育長が、「災害科学科は、東日本大震災から学んだ教訓を確実に次世代に伝承し、今後国内外で発生する災害から一人でも多くの命とくらしを守ることができる人材を育成する」とその意義と期待を述べた。記念講演では、同学科の開設に尽力した今村文彦・東北大学災害科学国際研究所長が登壇、とくに津波がもたらす災害の脅威に触れ、その防災・減災に取り組む多様な人材が多賀城高校から輩出されていくことに大きな期待を寄せた。(上記コメント等は同校ホームページより要旨を引用)。

災害科学科の定員は1学年40名。卒業後の上級学校(大学・大学校など)への進学を目標に、医療や都市計画などの専門家や技術者として企業・行政で活躍するリーダーの育成をめざす。教育課程は「科学英語」、「自然科学と災害」、「実用統計学」など、災害や防災を切り口に各教科を学ぶ。家庭と保健を合わせた「くらしと安全」、情報活用力を身につける「情報と災害」は普通科も共通。ボランティアを重視し、所定の活動をした生徒には単位認定する。

東日本大震災では岩手県釜石市での防災教育の成果として中学生が果たした避難誘導での大きな役割が知られる。また、東北福祉大学(仙台市)の防災土学生による地域と一体となった実践事例は、大学生の防災活動の先端を切り開くものだ。こうした被災地での中高生、大学生など若人の防災活動の活発化で、防災の志は次世代へと確実に受け継がれるだろう。

[>>《Bosai Plus》2014年6月1日号\(No. 91\):「新たな地域防災の担い手浮上」](#)

[>>宮城県多賀城高等学校](#)

●話題を追って[3]:次世代防災を担う若人たちへの期待 —減災産業振興会「グッド減災賞」
**18歳の“国際派 防災・減災イノベーター”が 次世代の防災を牽引する
仁禮彩香さん——「未来に責任を持つべき世代として、自らの考えで減災政策を立案し、世界へ発信したい」**


「グッド減災賞」を主催する一般社団法人減災産業振興会のロゴ(画像クリックで拡大表示)

一般社団法人減災産業振興会(仁禮彩香(にれい・あやか)・理事長)が主催する「PIF 第2回グッド減災賞」が、去る3月13日に仙台市で開催された「第3回 PIF (Post-disaster Innovation Forum 2016)」での会場投票とオンライン投票、審査委員会の評価点により決定された。

「グッド減災賞」とは、個人や家庭単位での自然災害への自助力と共助力を高めるために開発された優れた製品・サービス・システム・プログラムを表彰するもので、“子どもたちが選ぶ”(後述)ところに独自性がある。今回は全国24件のエントリーのなかからグッド減災賞優秀賞に、一般社団法人Smart Survival Projectの必要な人に必要な支援を必要な分だけ届ける「スマートサプライ(スマートサバイバープロジェクト)」を決定。2位(優秀賞)は一般社団法人(非営利)雄勝花物語の東日本大震災から学ぶ「防災教育」および「復興教育」の学びのプログラムの提供、3位(優秀賞)は一般社団法人Project72の自助を学ぶ体験型被災訓練プログラム「SHIBUYA CAMP」を、ほかに優秀賞、審査員特別賞を選定した。

前段で紹介した宮城県多賀城高校はこの「第1回グッド減災賞」に選定されているが、これを主催する減災産業振興会は「グッド減災賞」のほか、「世界防災ジュニア会議」なども主催する。そして注目されるのは、理事長を務める仁禮彩香さんが1997年生まれの18歳だということだ。彼女は中学2年で同級生と“子どもによる子どものための未来創造企業”株式会社グローパスを起業、そして2014年に減災産業振興会を創設している。防災(減災)への関心は、「未来に責任を持つべき世代として、自らの考えで減災政策を立案し、世界へ発信したい」と考えたから。国際派“防災・減災イノベーター”とも言うべき頼もしい次世代の登場である(ただし、彼女は20歳で“子ども”は退く、と宣言しているようだ……)

[>>一般社団法人減災産業振興会](#)